

# 浄土

九月号

昭和四十四年五月廿日 第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）  
昭和四十四年四月二十八日 運輸省（特別扱承認雜誌第三五二号）  
昭和四十四年八月二十五日印刷 昭和四十四年九月一日発行



第三十五卷

第九号

法然上人鑽仰会



## 目 次

表紙「月かげ」松涛達文画

### 《彼岸特集》

|                         |              |      |
|-------------------------|--------------|------|
| 彼岸会に思うこと……………           | 山 口 諦 存…………… | (2)  |
| 彼岸の行事に想う……………           | 伊 藤 唯 真…………… | (5)  |
| 法然上人二十五霊場をめぐりて②……………    | 村 上 博 了…………… | (9)  |
| 私の座右銘 若き日の友をなつかしみ……………  | 戸 川 靈 俊…………… | (14) |
| シルクロードとコーカサスへの旅日記④…………… | 佐 藤 治 子…………… | (16) |
| 十二因縁⑨ 顛倒の念(取)……………      | 渋谷 賢 応……………  | (21) |
| この頃思うこと……………            | 石 井 真 峯…………… | (24) |
| 仏事の心得とお作法④お仏壇について……………  | 福 西 賢 兆…………… | (27) |
| ハガキでひとこと 彼岸に思う……………     |              | (29) |
| ひとくち伝記⑨ 開教に生命をかけた人…………… | 高 橋 良 和…………… | (30) |



## 今月のことば

ススキの穂をわたって、秋涼がしのびよってくる爽やかさを感じる季節である。ひんやりする高原の宵を散策しながら、ススキ越しに見る月の美しさは、また格別である。

その月に人類が第一歩を踏みだしたのであるが、月に人間がいくということは、人類の長い間の夢が実現したわけである。科学技術のかぎりない進展はすばらしい。

しかし、すばらしい科学の発展が、必ずしも地上の人間を幸福にするとはかぎらない。科学を進歩させてきたものは、理性であるよりも、なにかを人間が求めつづけてきたからであろうが、それは、人間が当然求めなければならぬものとは逆のものを求めた場合もあるわけである。現在の生活を創造したものは、科学技術のたゆまない進展の恩恵であることは勿論ではあるが、一面、科学は、人間の本能的なものによって動かされてきたことも事実である。たとえば、機械力に頼って人間の一本の腕の力の何倍もの力を持つとうとする夢が、いつか機械力を生み出したわけである。一方では、科学は人類絶滅の戦争の武器と化していく。宇宙の新世紀開かれ、月に着陸し人類が踏みこんだ意義は大きいが、それが地上の人類にいかに関与するかを冷静に考える必要がある。

アーノルド・トインビーは、月着陸の意義について、つぎのように警告している。

—人類の達成した科学技術と倫理との間に横たわる、愚かしい危険なギャップがある。このギャップはいまも大変大きく、日とともにさらに大きくなっている。わが世代の課題は、手にした善悪両用の巨大な力を、精神的に支配できるまでに、人類の倫理、宗教を高めるべく努力することである。—

開かれた宇宙時代こそ、正しい宗教や信仰について真摯にもとめる必要がある。アポロ十一号のアームストロング船長が「美しい地球がみえる」といったが、その言葉通りの美しい平和な地球にするために。



## 彼岸会に思うこと

山口 諦 存

(浄土宗教化部長)

暑い夏も朝夕は涼しくなり、朝露の結ぶ美しい草を踏み、軒端にすだく虫の声を聞き、風鈴の澄んだ音が、かそけく響きますと、もう天地間のすべてのものが、すっかり秋のたたずまいとなります。

爽涼の秋といいますが、さわやかで涼しいこの季節に、秋の彼岸を迎えますことは、一入意義のあることと思うのであります。

秋を読書の秋、思索の秋などと呼びますが、静かに人間性の本質を探り、その本源に溯ることも、秋こそ最もふさわしい季節であるといえましょう。

特に現在は「交通地獄」という、恐ろしく、悲しい事実が昼夜の別なく繰りかえされています。「親知らず、子知らず」は日本海岸の難所として有名なところですが、今

は都市にも田舎にも、一步戸外に出ましたならば、いたるところに「親知らず、子知らず」の難所があり、安住の地や家を失っている多くの人々があります。

又、交通のはげしい国道線を横断しようとする時、幼い子供が手を高々とあげて、右と左の安全をたしかめながら横断する姿は、全く痛ましい「交通地獄」の縮図でもあります。又、お年寄りが信号を見誤り、車の間断を見て飛出し、交通巡査に大きな声で、注意をうけることもたびたびあります。しかし、お年寄には決死の横断なのであります。

こちらの歩道から車道を隔てて、無事向うの歩道へ渡ることにすらも、なかなか容易なことではありません。

交通信号をたしかめ、正しい道を正しく渡る、口では何でもないことですが、人も車も「命を大切に」の合言葉

で、事故の絶滅を期しながらも、依然として、痛ましい事故は毎日繰りかえされ、ますます殖えるばかりであります。

ある日のことであります。お釈迦さまはガンジス河の岸にそうた村に留まって、弟子たちのために、懇ろに法をお説きになりました。

「弟子たちよ、むかし、マガタ国に、ひとりの愚かな牛飼いがいた。雨期も終わったので、彼は牛の群れを連れてガンジスの河を渡ろうとした。しかしこの牛飼はこちらの岸も向うの岸もよく調べず、渡し場でない所を、牛の群れをつれて渡り始めた。無謀なこの渡河は、大切な牛を河の中流でみな溺れ死なせてしまった。

弟子たちよ、むかし、また同じマガタ国に、ひとりの賢い牛飼いがいた。彼もまた、雨期の最後の月が終って、牛の群れをつれてガンジスの河を渡ろうとした。彼はまず、今立っているこの岸のあちらこちらをよく調べ、また向う岸もよく観察して、よい渡河点を発見した。それから連れている牛の群れの中の、最も強い牛を選び出して、流れに入れて安全に向う岸に泳ぎつかせた。

次には比較的強く馴らされた牛を流れに入れて、これもまた無事に向うの岸に渡した。最後にまだ力の弱い小牛たちを河に入れた。これを見た向う岸の母牛たちは、力の限り吼

えて励ました。その声に応じて力を得た子牛たちも懸命の力をつくして、無事に母牛の待つ岸に、流れをよぎって元気に泳ぎつくことができた」。

このお話は極めて身近な譬をとり出して、おさとしになっていますが、これはわたくしたち、現実の人間生活をこの岸とし、理想の人間生活をかの岸に定めて、眼前の河を見ながら、具体的な彼岸への道を示されたのでありまして、到彼岸即ち「かの理想への道」を、具体的に教えられたご説法であります。

彼岸とはくわしく申せば、到彼岸であり、かの理想世界へ到着する、行きつくことであり、理想または完成を意味するのであります。聞けば何でもない平易な、ご説法ではありませんが、味えば味うほど深く酌みつくせない、み教を今直々にお釈迦さまから、お聞きしているように思えます。

漫々と水をたたえた、急激な流れの大河を渡る地点は、余程くわしい調査と周密な計画を必要とします。この夏、世界的な壮挙として、人類の耳目を集めました、アポロ一一号の月への到達も凡そ例外ではなかったはずであります。

法然上人はあの賢い牛飼のように、理想の世界、仏のみ国へ生れゆく最も安全な渡河点を、八万四千の法門の中から、念仏を申せばただ本願力によって、この凡夫にやがて悟りを

得せしめたもうところを選びとられたのでありまして、これが時代と人になつた最も安全な横断道路なのであります。

心を遙か八〇〇年の昔によせ、法然上人のお開きになりました、浄土のみ教を信じて、ひたすらに彼岸へ彼岸へと、一層力強くお念仏の道を歩まねばなりません。

さて、第二次大戦が終りに近い七月二十五日、ビルマ派遣軍の主力は、世界戦史にもない「シツタン河」渡河作戦を敢行しました。

雨期のシツタン河は夜陰とはいいいながら、遙か彼方に対岸をみとめることができました。ビルマの三つの大きな河にかぞえられているこの激流、流れの速さは二〇〇米、三〇〇米もあり、濁流は音もなく無気味な静けさを漂わせていました。しかも、対岸には敵が渡河中の日本軍に銃撃を加えてきています。進むも退くも留まるも、待つものはただ死だけであります。

朝をまたず渡河はしなければなりません。作戦は至上命令であります。ペグー山系から携えた約六米の長い二本の青竹を組合わせて筏をつくり、五人を単位として渡河班を編成し、泳ぐことのできる者が筏の責任者となりました。わたくしは、筏の責任者として、四名を対岸に渡さねばならないことになり、大切な四つの生命を預った責任の重大さを考えま

した。

筏には各人の被服、兵器、弾薬が乗せられている。その重さだけでもすでに危険状態であるから、どのような事態が渡河中に起きようと、筏をかかえてはならない。筏には片手を触れて、片手で水を切れ、もし、両手で筏にしがみつく者があつたならば、河中につき落すことを約束し、ゲートルを筏に固く結びつけ、これを肩にかけて決死の力泳をすることとなりました。

まず筏を浮かべて、重心をととのえ水中に飛び込みました。名にしおう「シツタン」の激流は岸が垂直につつ立っており、日本の河のように遠浅ではなく、河の流れは上中下の三層ほどに分れ、随所に渦巻きがあることを知りました。水深は想像もつきません。

周囲には筏が転覆する、戦友が溺れる。わたくしは、筏に向って心から静に十念を唱え、み仏の加護を念じ、預りました四名の生命を彼の岸まで、共に無事渡さねばならないと決意しました。

今はすべてを仏にまかせた、わたくしの力泳がいよいよ始まりました。「よいしょ、よいしょ」と掛声を合せて、五名は一心同体、ただ目ざすところは向う岸であります。ようやく激流の半ば以上を突破しました。やれやれと思う間もなく

流れの速さは急に増し、河上からは全裸の將兵が救いを求めつつ矢のように流されてゆく、従軍看護婦や婦人が力尽きて泣きながら流れてゆく声が一瞬耳に痛い、この恐ろしい光景のかたわらには、あちらこちらに大渦巻きがあり、筏も人もそのまま、一枚の木の葉を呑むように、きりきりと三、四回急転して魔の口に消えてゆく。

この時誰かが思わず、筏にしがみついた、筏は沈みかけた、一瞬、四人は大声でとなりつけ、とに角、ことなきを得ました。岸辺の流れは目の廻るほど速い、わたくしは、いくたびもいくたびも、岸辺の芦をつかんだが、芦は根からもぎとられて、筏をとどめる力にはなりません。この時対岸の友軍が投げしてくれた、ロープが幸いにわたくしの首に引かかった。すばやくこれをしっかり手にした時の喜び、たしかにこ

## 彼岸の行事に想う

—

秋のお彼岸のころともないますと、ぎらぎらした炎天もいつしか澄みきった空にかわり、青かった稲もすでにたわわになった穂をすっかり秋めいた風に波うたせています。「暑さ

の命綱によって生を勝ち得たのです。ただ一枚まっていた木綿の片れも、激流にもぎとられ、一糸まとわぬ丸裸の五名は対岸の土をいくたびもいくたびも力強く踏んで、生きていくことをたしかめました。この作戦によって全軍の三分の二は、シッタンの藻屑となり、再び雨と泥濘に悩まされた日本軍に「日本降伏」の悲報が待っているといふとは。

命をかけて泳ぎついた彼岸も、同じ苦悩の岸に過ぎません。俳人、山頭火の「わけ入ってもわけ入っても青い山」であり煩惱無辺のところでもあります。

人の住む此岸を仏は五濁悪世と説かれましたが、苦海を渡る船は仏みずからの手によって既にしつらえられています。ただ仏力を信じて念仏を申せば、光明の彼岸、仏のみ国に生れて悟りを得、仏たらしめたもうのであります。



伊藤 唯真

(滋賀県栗太郡在住)

寒さも彼岸まで」と古くからいいならわされているとおり、季節は暑い夏からさわやかな秋に移っています。

秋のお彼岸は、春の彼岸に対して、あとの彼岸ともいわれています。「彼岸」は御承知のように仏教から出た言葉であ

ります。江戸時代の「仮名暦略注」は彼岸を説明して

彼岸は曆家の撰み出せる日にあらず。元来、仏教より出たる日なり。彼岸の中日は天地陰陽の氣平等なるが故に、帝釈と修羅と会合して世界の人の善惡を記録し給うを以て、此の日の前後七日の間は善根を蒔くべくして、惡事をなすべからず。

と述べています。また「連珠合璧集」は

春秋二度あり。七日の間なり。彼岸の四日を仏氏なづけ  
て中日といい、また時正ともいう。

と説いています。

いうまでもなく、春分・秋分には昼と夜との時間がひとしくなりますので、時正じしょうともよばれるのでありますが、ではなぜこの時正つまり曆学上でいわれる春・秋分の前後七日の間が彼岸といわれたのでしょうか。右に引いた二つの書物は、二つの言葉が仏教と関係していることを指摘するだけで、彼岸といわれる事由をくわしくのべていません。時候上の一定期間が仏教用語でよばれるに至った訳は、通常つぎのように考えられています。觀無量經に説かれる日想觀を行なうのに最も適した時期が春・秋分であるとされ、日がまっすぐに西へ沈むのをみながら西方浄土の彼岸に想いを凝らしたのを、到彼岸（波羅蜜多）の義によせて彼岸会と称されるよ

うになり、この彼岸会が行なわれる期間を彼岸とよぶようになったのであろうというのであります。

日想觀は、弥陀のお浄土に対する十六種類の觀法のうちの第一であつて、初觀と名づけられています。善導大師はこの日想觀を釈して

冬夏兩時をとらず、唯春秋の二際をとる。其日正東より出で直に西に没す。弥陀仏国の没する処に当りて直に西方十萬億刹を超過す、即ち是なり

とのべられています。太陽がまっすぐ西に没する春・秋分こそ、西方の浄土を想うこの上なき時期であると思われるのであります。

このようなわけでありますからお彼岸は浄土教、弥陀信仰と深い関係があります。歴史的にみて彼岸という言葉の普及と浄土教の発展とが一致しているのはこれがためであります。しかしこの日想觀を中心とした彼岸もいつしか祖先信仰と結びつき、庶民の年中行事となった江戸時代には、阿弥陀詣や墓参を中心としたものになりました。現在も彼岸のうちにはあちこちのお寺で彼岸会がつとまり、日ごろ人気の少ない墓地もお彼岸参の人びとで賑わいをみせています。

最近若い世代の間では彼岸の中日という言葉もしだいになすれてきているように思われます。とくに昭和二三年七月、

法第一七八号をもつて三月二一日を春分の日、九月二三日を秋分の日として国民の祝日に制定されてからは祝日の意識が強くなって、彼岸という宗教的な日であることの認識がうすれつつあるようで残念であります。しかし政府によって秋分の日が「祖先をうやまい、なくなった人びとをしのぶ」と性格づけされていることからわかりますように、かつて父祖がいただいた彼岸のイメージはそのまま現在に伝承され、年中行事としての役がさらに受けつがれようとしていることは明らかであります。

## 二

右にのべましたように、一年のある特定の時期が彼岸という言葉でよばれたことは、信仰史上たいへん意味深いことでもあります。さらに彼岸が日想観と関係をもつこと久しかったのは、宗教的自然観の上からも重要なことであります。そもそも日本人の魂の中には、国土のうるわしい景観美にはぐくまれて、自然が大きな地位を占めているのでありますが、日想観もまた日本人の自然への深い愛と関係があると思われる。夕日の美しさに対する宗教的な憧憬が浄土信仰と密着していたのであります。

日想観の靈地として、古くから四天王寺西門が有名であります。この西門の坂のはとりに一心寺があり、日想観の行法

がつとめられていました。一心寺には宗祖法然上人が日想観を修せられた事縁に開創の起源をもつとの伝承があります。江戸時代につくられた宗祖御遺跡の案内書たる「口称一行巡拜記」にも

文治元年の春、大師（法然上人）此所に来り玉ひ、西門の岸に四間四面の御堂を建立して住居したまふ。是を新別所といふ。後白河の法皇此寺に臨幸しまして、大師とともに日想観を修し玉ふ、その時法皇の御製に、難波潟入にし日をも眺むればよしあしともに南無阿弥陀仏と詠じ玉ふ。落日を觀するに居ながら東門中心の方所をしる。誠に日觀相応の道場なり。今に浪花遠辺の人々彼岸の拜し奉ることのまた大師此御堂にて、阿弥陀仏といふよりはなはだおほし。また大師此御堂にて、阿弥陀仏といふよりはかは津の国のなにはの事もあしかりぬべし。と詠じ給ひて、即六字宝号のかたはらに書そへ玉ふを世に難波名号と称して、此寺の第一の重宝なり

と書かれています。この「日觀相応の道場」たる一心寺では今次大戦で罹災するまで、彼岸の中日に日觀堂において日想観の特殊行法がつとめられていました。彼岸には入日を拜する庶民が群参した四天王寺や一心寺のある難波荒陵のあたりは、古くからの浄土信仰の靈地なのであります。

彼岸会の中心が日想観にあったことは、彼岸の行事が浄土

信仰に支えられていたことを物語っていますが、さきにものべましたように、時代が下るにつれ彼岸の行事が民俗行事化してきますと、祖先や死者の供養という面が顕著になりました。このような変化は、此岸より彼岸に至る仏意を、鎮魂慰霊の機能を念仏にもたせて村々を勤め歩いた説経僧にあずかるところが大きいかと思われまゝ。彼岸も民俗行事化しますとさまざまな要素を混在させるようになりますが、なんといつても死者供養が中心になるようです。次にのべます遠州桜ヶ池の秋の彼岸の行事はその例であります。静岡県浜岡町佐倉にある桜ヶ池は、法然上人のお師匠・皇円阿闍梨が竜蛇となつて池中にひそんだことで鎌倉時代から知られています。が、中日には新仏のある家の人びとが集つて死者のために水供養を行ないます。櫃納めという特殊行事もありますが、この櫃納めのあとで、経木を丸くまげた小さな底なしの柄杓でもつて池の水をすくうようにして、この柄杓を池へ投げるのです。お櫃納めというのは選ばれた青年が奉仕するもので、赤飯をお櫃に入れて池の中央へ立泳ぎでいき、身を躍らせてお櫃ごと沈めるのであります。第一のお櫃は池の神に、第二の櫃は皇円阿闍梨に捧げると説明されていますが、多い年には二百個もの櫃が沈められるとのこと。このお櫃納めの行事も古くからあり、例の「口称一行巡拝記」には

かの所の村民八月彼岸の中日祭礼を営て供物を櫃に入て池の中心に入れば、おのづから水底にまきこまるは毎年の事とかや

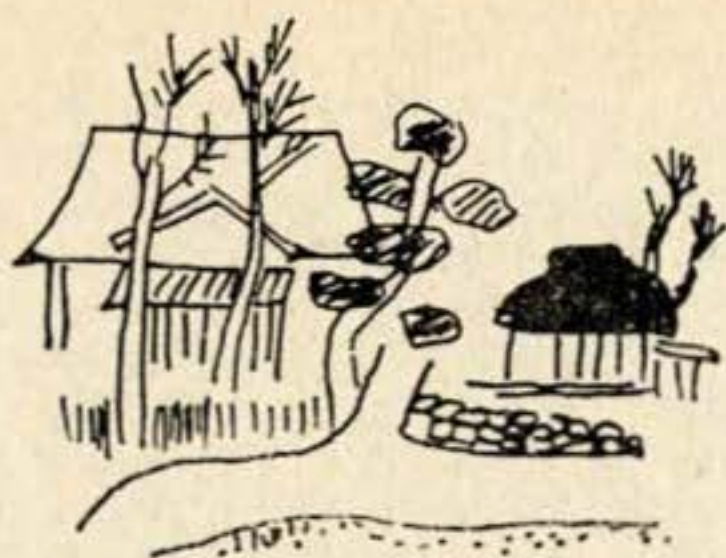
とあります。池畔に浄土宗応声院の別院があつて、彼岸には各地の講中がお籠りにつめかけ一杯になります。お櫃納めは家内安全や病氣平癒のために行なわれているようですが、民俗学者はもともとは水中にひそむ靈に供えたのではないかと考えています。桜ヶ池は死者の靈がよつてくる靈地であつて、このお櫃納めも新仏の水供養も、ともに死靈をとむらうものでありまして、かかる靈地に早くから念仏者が集まつていたのも、また法然上人が皇阿闍梨のために七日七夜供養されたとの伝承があるのも、宗教民俗学上きわめて注目されるところであります。

### 三

さて、以上一心寺と桜ヶ池を中心に、行事としての彼岸についてのべてきましたが、時のリズムに随う周期伝承、つまり年中行事となつた彼岸は世の流れもあつて、宗教性を喪失しつつある感がなきにしもあらずであります。それ故いまこそ魂の故郷たる浄土への信仰——これが本来の宗教としての「彼岸」であります——を深め、コヨミの彼岸を信仰の彼岸へと転化させたいものであります。

## 法然上人二十五霊場をめぐりて (二)

村上博了



### 一

わが法然上人の浄土宗教義は、その当時迄の大陸伝来仏教々義より、更により深くほりすすめて、釈尊出世の本懐は「いづこにありや」、仏教本来の目的は「なんであったか」、その本質であり精華であるものを充分示された、世にも有難い尊い教義であった。上人を世に宗教改革者と仰ぐ所以も又ここにあり、上人のこの発見は後に日蓮聖人の法華宗を呼ぶ一因である。

それだけに修行中の上人の努力精進は言語に絶するきびしいものであった。例えば御伝に大蔵經（又一切經ともいう）を五遍も繰りかえして研究されたと伝えられ

る。大蔵經は經律論の三部六七千卷に及ぶ一大叢書である。一冊一冊を手にとって中国文である難解なものを研究しつくされた。又諸大寺名利の高僧たちを訪い、したしくその教義を研究されたその結果の浄土宗教義である。そのよき一例を伝えるものは、札所御霊場三番々外室津浄運寺と第四番札所尼崎如来院である。

### 二

建永元年三月十九日、上人が四国迂坐のための小さな和船が、室の津港に停泊された。

有名な生き仏、念仏元祖法然上人のお船と知ったあまたの人々が、結縁と教化を願って集ったのである。室津

遊女友君もその一人であつた。

御伝には

同国室の泊につき給に、小船一艘ちかづきたる、これ遊女がふねなりけり。遊女申さく、上人の御船のよしうけたまわりて推参し侍なり。世をわたる道まぢまちなり。いかなる罪ありてか、かかる身となり侍らん。この罪業おもき身、いかにしてか、のちの世たすかり候べきと申ければ、上人あはれみての給はく、げにもさやうにて世をわたり給うらん、罪障まことにかろからざれば、報酬またはかりがたし。もしかからずして、世をわたり給ぬべき、はかりごとあらば、すみやかにそのわぎをすて給うべし。若し余のはかりごともなく、又身命をかへりみざるほどの道心、いまだおこりたまはずば、ただそのままにて、もはら念仏すべし。弥陀如来は、さやうなる罪人のためにこそ、弘誓をたてたまへることにて侍れ。ただふかく本願をたのみて、あへて卑下することなかれ。本願をたのみて念仏せば、往生うたがひあるまじきよし。ねんごろにをしへ給ければ、遊女（友君）随喜の涙をながしけりと伝えている。随喜の涙をながしたことは、上人のお話がよく判かり感激したからである。上人は友君について

側近の信空に

この女性信心堅固なり、さだめて往生をとぐべし

と仰せられている。いかなる理由で遊女となつたか、その経歴について伝えるものがない。当時は平氏源氏の実力者が、権力をめぐって合戦、その影響は各地に土豪と武士階級を生みつつあつた時代であり、合戦が各地に起つて乱世であつた。弱い女性と子供たちは最大の被害者であつたことをかえり見る時、従来の遊女とちがつた文化の香りが高いものであつたかも知れない。

晩冬、上人帰途の折り、この地に立よつて、かの遊女は「どうしているかしら」と尋ねたところ、上人のみ教をいただいてからは、

このあたりに近かき山里にすみて、一すぢに念仏し侍りしが、いくほどなくて臨終正念にして往生かとげ侍き

と、土地の人が知らせてくれたのである。その話をきいていられた上人は、

しつらんしつらん

と仰せられた。しつらんとは、さもあろうということで、女性とても如来の本願を深く信じ、一心にお念仏を申す時には、本願力によつて往生することができる。女

人禁制の旧仏教の姿と相対比する時、平等無差別又は悉おつきようになべつない有仏性の積尊いぶつしょうありの教示が、上人によって始めて開眼され果実となったのであった。同寺には、上人由縁ゆかりの御影を安置し、上人の和歌、名号、おけさと伝えられる什宝並びに友君の木像を安置している。境内は内海の景を一望に収められる景勝地である。同寺御詠歌は

かりそめの 色のゆかりの恋にだに

あふには身をも 忘れやはする

という。男女の本性を歌うたう、又仏教は人生の生活の中にあることを物語る。

### 三

第四番札所尼崎市如来院である。同院は現地に移る前は神崎釈迦堂といわれた。聖武天皇の御願寺行基ぼさつ開山と伝えられる四十九院の一院で釈迦堂の名残をとどめる名刹であった。同院には神崎の遊女五名が、上人の教化を喜んで、その黒髪を布施されたものが什宝として保存される。このことは勅修御伝には伝えられない。通称十卷伝（三河国山中法蔵寺所伝）、又黒谷法然上人伝並びに摂津国名所図絵等には詳しく伝えられている。

建永元年三月、上人の船は神崎川をさかのぼり神崎橋上り二百米ほどの所に船がかりされた。夕やみせまる頃、遊女五名が従女とらひめに柵さくを押させ唐人笠をさしかけて、上人のみ船近くに漕ぎよせたのである。如来院の伝える五名の遊女は、東、宮城、刈藻かりも、小倉、大人うしという人々であった。その名称より見ればは（一）その生国を現わしている者や（二）は刈藻、大人、小倉というように文化の香り高いもの雅名を名のる者たちのようである。

彼女らは、上人のすすめたまへる念仏を、す直に有難くうけとり、生命とたのでいた黒髪を惜しげもなく切りとって、上人に布施として捧げたのであった。女性として大切な黒髪を切りはなすということは、尋常一様のことではない、感激と法悦の有りがたさに、そうさせたのである。

上人の偉大なる感化力、上人がすすめ下さる念仏の大功徳であったかも知れない。それらは現在黒塗の箱に収められ什宝として如来院に保存されている。法然上人秘伝には、江口、神崎の遊女達がきそって、上人の浄土宗法問を聴聞し感激されたことが伝えられる。この時参集したのは、遊女五名だけではない、多くの他の遊女や人々も又聴聞したのであった。

それらの遊女の中に徳来という名の三十一才余りの婦人がいた。かの女は死別した三才の子供を、是非今一度見たい、どうぞ御ねがいを申しますという。上人は、

臨終の時に見るべし

と仰せられている。一度死んだ人は、いかに親しき間柄といい、生前の姿を見ることは無理な願である。静かに胸に手をあてて考えると「できない願い」ということが判る。

しかし是非共見たいというところに、親に甘える子供の姿がある。上人の温容は丁度慈父のようであった。又如来さまのように、一度あっただけで甘えることが出来るような「暖たたか味」の溢れるお方であったことが、この一事を見ても判る、上人は実に人々の慈父として、人々にはしたしまれ尊敬されたのである。

この時、上人は徳来に因果のことや地獄相について、こまやかに物語りがあった。臨終の時見るべしということは、含みある味の深い言ばである。人は無常の風にさそわれて、いよいよよという時には、亡くなった知人、親戚の人々等が、臨終人を迎えに来るという。当人には、少くとも亡き知人が見えるのである。現在も変るところがない。徳来のみどり子の姿も、母には見える訳であ

る。筆者の住職寺は、古い御朱印寺であり、いつも念仏を申すことで、有名な専修寺という寺院であるが、常念仏講の人々達から、その話をきくことが多い。夢に亡きあまたの知人が見えて、顔を見ながら話合う時には、いよいよ臨終が近いといわれる。上人が「臨終の時見るべし」といわれたことは、われわれも何日か経験することであって、人生永遠の真理である。

顔が見えない。あちらを向いて又は頭だけが見えての話合ならば別条がない、五臓のつかれということである。

ここで問題となることの1は、一体人間に靈魂がありや無しやということであろう、靈魂は幽靈幽魂とはちがう。經に人生には前生がある、その前生に於て、いろいろの徳本善本を積まなければ、人と生れることができない、上人の御法話に

うけがたき人身をうけて あひがたき本願にあひて おこしがたき道心を発して はなれがたき輪廻の里をはなれて 生れがたき浄土に往生せんこと 悦の中の悦なり

とあるは、社会の道義を興し社会の一隅を照し、三宝に帰依し如来の御本願念仏を扶けたまえ南無阿弥陀と唱え

る時には浄土往生も人界に生をうけることもできる。念仏は世の中のあらゆる功德に勝る、老若男女どなたもお念仏を申すべしとする所に靈魂がある。

神崎釈迦堂が如来院と改称したことにふれた。如来院から元禄九年（一六九六）増上寺録所に提出された同寺由緒書に、承元元年十二月、上人が四国讃岐国生福寺仮寓からの帰途、この神崎釈迦堂にお立寄りになって、春教化した遊女たちが、黒髪を上人に布施し、お念仏の行者となって一心に念仏、入水往生されたことを憐み、その追善別時念仏会を開白修行されたと遺跡寺院と伝えられている。

同地あまたの入信帰依者たちの要望に応え同寺は浄土宗となり、上人を開山上人と仰ぐに至った。上人は永くとどまる訳にはいかない、門弟湛空を住持としてここにとどめられた。同寺は八世住持の時の永正十五年（一五一八）七月十三日、大台風が来襲、西国から荒れ、この日摂州大洪水、神崎川も大はんらん大洪水、同院諸堂大破、釈迦如来像も海中に没してしまったのである。余ほどの大洪水と見えて諸記録に被害甚大と伝えている。ここに改めて善光寺如来を請来本尊仏と仰ぐに至った、如来院の名称ができたのである。翌十六年二月細川武蔵守

高国が尼ヶ崎城と城下町を經營するにあたり、翌春、如来院は神崎から尼崎の大物に移された。元和三年新領主戸田氏鏐によって、諸寺と共に現在の土町に移転したのである。御詠歌は

身と口と 心の外の 弥陀なれば

我を忘れて 唱へこそすれ

### —— はなしの 泉 ——

「願う」ということ、私たちは日頃の忙しい生活の中に、この願うということを忘れがちになっております。

自分に都合の悪いことが生じた時にのみ、他に願いをかけますのが常でございます。この願うということは、仏や神にくりかえしているということが本来の意味ですが、人は都合悪き場合に、下手に出てたのむという意味でこのことばを用いております。

この世は人の和合あって、はじめて平穏な社会が形づくられるのですが、私利私欲に走る人々の葛藤で、絶えず争いが生じ、悲劇がくり返されております。

ここでもう一度、人本来のあり方を冷静に考え、下手に出てたのむのも結構ですが、お互いに願ひ合える社会を生み出すことも、これまた必要ではないでしょうか。

## 私の座右銘



### 若き日の友をなつかしみ

戸川 靈 俊

(京都市黒谷西住院住職)

汝自身の道を往け、而して人の言うに任せよ

ことごとしく「私の座右銘」というべきほどのものではありませんが、若い時に教えられ、知らされた斯の種の語句の中で、一番いままなお印象づけられ、事ある毎に、私の歩みの師となってくれているのは、このダンテの言葉なのです。

そして又、業卒えてゆく若い人たちに乞われて、時に色紙に拙筆を揮うのもこの言葉です。それほど私はこの言葉に青年の日から深い熱い愛着の情を抱いています。

この言葉を知ったのは、その頃私が直々にダンテの神曲を読んで心惹かれたというよりも、この言葉を引いて私に示してくれた同年の友の影響を忘れることができません。

想いを四十幾星相の過ぎ去った私の学窓の日に廻らしてみたいと思います。

同学年の他の三クラス、いずれも四〇人位が定員でしたが、ドイツ語を第二外国語とするのに、私の所属したクラスだけが第二外国語にフランス語を選んだ者の少数であっただけにひとつの自持めいたものをもって、堅い友情に結ばれていました。

フランス語の先生は高木佑一郎『僕は法科(東京帝大)出だが、大学時代は殆んど文学部の講義を聴いていましたね』という初対面のあいさつでしたが、根が語学それ自体のご専攻でないだけに、文法の教えぶりは正しいのですが、受ける側の文法への理解の程度を往々超えてのルソーやミュッセルらの文学書の講読は楽しいものながら、相当難解なもので

あったことが想い出されます。

高木先生は私たちが三年の課程をおえるときともに、東京に帰えられ、その後評論家として翻訳者として起られたように記憶します。ジュール・ルナールのものを白水社から出されたのもその頃のことです。

あの年頃の者が必らずとりつかれる熱病の一つ同人雑誌、私たちも亦、高木先生を中心に『向日葵』というガリ版りの同人誌をつくりました。

何号まで出したか今は、その記念物も、身辺の変動で手許に残されていないし、記憶も薄らいでいるので挙げることはできませんが、お互い出身地を異にする者が、一つの学園に初めて友情を結び合えるあの十九の年代の自由奔放さが時に、創作に、評論に、その

若い力をぶちまけて表現していったことだけは、今思い起しても、あのころが人生での一番恵まれた頃だとひとしきりなつかしまれてなりません。

その編集を終始引受けてくれたのが思い出なる旧き良き友、山内教鐸です。

「汝自身の道を往け。而して人の言うに任かせよ」 終生かけて私が忘れないであろうこの言葉を教えてくれた友、その友こそ彼山内なのです。

三年の課程が終り、したがって私たちがおのがこれ新たに大学のそれぞれ専攻の道に別れ進もうとするとき、三年の夢を育んでくれたクラス解散の記念の『向日葵』の終刊号の編集後記に、彼が——汝自身の道を往け、而して人の言うに任かせよ。これはダンテ云い、マルクスまたその資本論の序文に引くところの言葉であるが——と文章をはじめて、同窓同学の友の前途に別れとはげましを与えてくれた文章は実に簡にして名文、しかもこの友の文章だからこそ、私が自分の終生の指針とも座右銘ともなるべき詩聖ダンテの言葉をはじめて知ることができたという意味で、

私は彼に無量の感謝の思いをよせるものです。

私は都合で大学の課程は東京の大学にうつりましたが、その春の新学年、わが友山内ら新鋭の大学学部一年の春、そこでは教権と自由討究との精神の抗争から親鸞教学の新らしい道を往かれる真宗学の梅原真隆、フランス哲学の森川智徳、ドイツ文学の園田香麿ら十数名の革新教授が古い伝統を誇る学園から去ってゆかれるという大事件が起りました。

勿論わが友山内らは、かれらの憧れの師を求め、新しい宗義解釈に干渉する教権に反抗して立ち上ったのです。当時のジャーナリズムにすれば宗門を背景とし基盤とする学園としては実に珍らしい闘争で、全学挙げてのストライキは夏休みを完全にふき飛ばしてしまつたようです。

結果においては梅原真隆師らの連袂辞職と顕真学園の創立という劇的終末に結ばれたようですが、聞くならく、わが友山内はいま重要な文化財のあの鉄扉の校門を境にして、内なる学友と外なる警官の争奪の対象となつたということです。

東京で私は、間もなく人ずてに、彼の退学のことを知りました。

彼の故郷は伊勢の阿下喜。彼の生家はお西であるか高田派であるか何れかの宗旨のお寺。そして父君は伝統の法義に篤く、全国の門徒に法を伝える布教師僧。

学問を愛する彼が大学をやめた理由は、真理と恩師とに殉ぜんとする青年学徒の純情からか、或いは教団の伝統に忠実ならんとする古風な父君の教権に寄せる苦衷によるものか、私はその何れかは知りませぬ。

大学を去ったその日から、わが友は全然その姿を私たちの前から隠くしてしまつたのです。ダンテのその言葉の様に、おそらく彼は自分の道を往こうと選びとつたのでしょう。

学窓に別れてより今に彼を見ず、音信する日あるも絶えていらえなく四十幾星霜。

私の臉に浮ぶのは白線の帽子に黒マントのびったり似合う眉目秀麗、長身の秀才山内です。私の生きる限りこの言葉とともに、若き日の良き友山内は永遠に私の胸から消え去らぬでしよう。



〈中央アジア辺の主食のパン〉

## 「ブハラ」

三月二十七日。ブハラ空港のイントュールリストの待合所でバスの来るのを待つ。細長い部屋の正面の壁に大きな市内の案内図がかかっている。案内図即ち寺院の所在地を示しているものといってよい位、このブハラには寺院の遺跡が多いのだ。一枚ずつでもほしいのにその額以外は全然ない。写真はとってもよろしいというので、皆パチパチとる。やがてバスが来たので乗り込む。「泥の町」とでもいいたいような町並を走る。道の色と土をかためて造った家の色が同じで、窓が殆んどないため土でつくった塀の感じなのだ。暑い国のパキスタンのカラチで受けた感じと同じだ。

やがて町の端れのような所へバスは出る。広い道に面し、

## シルクロードと コーカサスへの 旅日記 - 4 -



佐藤 治子

のっぺりとした建物の前へ着く。これが唯一のブハラのホテル。学校の建物の一つでもあるような、味わいのない建物だ。部屋の割当てを済まし、各階のロビーの受付で鍵をもらい荷物をおき、すぐ昼食。

### 「ソ連の食事」

ソ連は昼食が一番皿数も多いし、時間をかける。午後よりバスで見物したり、飛行機にのったりする旅行者にとり、これは一寸閉口であった。朝食は大して変りないがトーストは一度も食べられなかった。パンは黒パンが殆んどでお皿に高く盛り上げて出している。このパンの切り方が面白い。一方が厚く一方が薄い。味も重い。この切り方はあとできくと、大きなパンを掌にのせサクサクと切るのだそうだ。何と不器

用な切り方と思っていたのが、これをきいてから中々うまく切ると考え直さずにはいられなくなってしまった。厚さのちがうパンが積み上げてあるといった方が適切ないい方だと思う位、味もそつ気もない盛り方なのだ。バターは豊富に出ている。

皆「味塩」をもって行かれたし、私も一びんもって行ったが塩はきれいで日本の食塩と同じ。お砂糖はもって行った方がよかった。角砂糖は岩砂糖とでもいいたい位かたい。ヨーグルトがコップに入って出される。かけるとお砂糖はザラメに近いもの。私達はヨーグルトをみて飛び上って喜んだ。羊のヨーグルトらしく真白ではない。

これは閉口という方が多かった。胃腹をこわさなかった私達は結局このヨーグルトと黒パンのおかげであったかも知れない。私はヨーグルトが出ない時は別に注文したところビンのまま渡され、牛乳ビンの倍もある大きさにのみきれず、もてあました事がある。昼食は一皿か二皿と思って全部食べてしまったら大変だ。まだまだ出る。そしてデザートにアイスクリームとお茶が出る。午後からの予定にゆっくり落付いて食べられない。終り頃はソワソワしているお客にサービスはいたってゆっくり。お茶はあきらめたと、立上って行く人もある。

一日のスケジュールが済み、ゆっくり夕食を楽しみたいなどと思っていると、とんでもない。いたって軽いもので品も少ない。健康維持のためにこの方がよいのかも知れないけれど、私達はお昼も控え目、夕食は足りないというわけで、黒パンでも朝食が待たれる位おながすいてしまうのだ。アイスクリームは実においしい。中央アジアは「チャイ」という日本茶に似たお茶を出してくれる。「お茶のみ所」所謂喫茶店がある。でも私は香りのあるしつとりと味いに深味のある日本茶の方がおいしいと思った。

旅行の初めの頃、私は手の色が黄色くなったのでどうしたのかしらと気にしていたが、結局果物不足、食事が変わったこと、そしてお茶も充分にのんでいないという事らしかった。サラダはある。けれども青いものは上にかけてある程度のもの。果物はたまに小さいリングが人数だけ盛られている。日本では八百屋、果物屋がどこにもある。そして品の豊富なこと、これは国外へ出て初めて知る有難さである。

ところがこのブハラに季節はずれのブドウが各テーブルに配ばられていた。「ウアーブドウ」と私はとびついて一口に入れてみた。一人一フサではなく一テーブルに三フサ位の割合である。その一粒の甘いこと、粒は細長い。ヒヤッと冷いので、どうして今まで貯蔵してあったのかをたずねる

と、地中にうめておくのだそうである。食後あまり売れ行きもよくないので、まわりの方に断って一フサを頂いて部屋にもちかえって果物にありつけた感をだきしめたのである。「干ブドウが実においしいですよ」と松田先生がおっしゃる。ところがその甘さにげんなりとしてしまった。

空港で一人の旅客がオレンジの袋を下げたのを見て、その夜オレンジ探しにロシア語のできる若い方二三人と近くの店を探し歩いたが全然ない。果物にうえている私はそのオレンジの事が忘れられない位いじがきたなくなっていた。ビタミンCを生でとりたかった。モスコへ行く前も一度タシケントへ戻ってバザール（市場）へ案内してくれた時、長い人の行列を見た。のどくとオレンジを売っている。これでは買うこともできない。ユーラーさんが「佐藤さんほしいでしょう」と同情してくれて、旅行者である事を説明して飛入りで買ってくれたのである。一ルーブルで八つほどあったかしら。バスへ乗り、早速皮をむくと実が赤い。主人は血のような赤さを見て「もういらないよ」とほしがらない。甘くて汁のゆたかなこと、ああ助かったと思わず口に出してしまった。

どんなに果物が少ないか、行列して買う人も他の店にみられない位大勢の人であるし、売っている小父さんは汗だくで

ある。果物、青い野菜は尊いんだなあと、ミカン・イチゴ・ナシ・リンゴと季節に応じて潤沢にある日本はありがたい。いつの間にか手の色はもとの通りになっているのに気がついたのは果物にありつけた頃だったろうか。夏期の中央アジアは果物が豊富だということはどうそのようである。

そういえばモスコのホテルできゅうりを立売りしているのを見た。立派な泊り客が買っている。値段をみると一本八百円になる。ただし太さも日本のよりは三倍位太いし、長さも二十五センチ位、水々しい立派なきゅうりだった。町角でもないホテルのエレベーターの前で小さいテーブルにのせて売っているのだからおどろいてしまった。

ピラフというまぜご飯がある。このピラフは中央アジアから世界中に行き渡ったものだということを今度初めて知った。そのピラフも何回かお昼に出た。ところが一番ごちそうの出る昼食のこと故、少しずつ口をつけていたにしてもピラフの出てくる時はもうおなか一杯になって、折角のピラフの原産地といっても一口か二口しか食べられなかった。

中には佃煮、醤油等までもっていかれた人々もある。住職は何でも食べて、その土地になれるのが一番いいのだと主張して、ニラに似た青いものに塩をつけてガリガリとおいしいといつて、つとめて食べていた。これも一つの考え方であ



〈ブハラのサマニ廟〉

る。湿度の少いカラッとした空気。「ぜんそくなんておこりっこはありませんね」と空気の澄み切っているソ連。私には余計果物、水分を必要としたにちがいない。

さて、その長いお昼の後、市内見物へとバスに乗った。

### 「子供達」

ブハラの南西部に、昔ブハラの町を囲んでいたという城壁の一部が廃墟となりつつその形を残している。長さ七マイル半、高さ八フィート、門は十一あったという。そのくずれかかった城壁をバックにキーロフ公園がある。荒れはてた昔の町の跡にアユブの霊廟あり、少し離れてイスマイルの霊廟があつて、広場の中にポツンと残っている四角の焼き煉瓦で組み立てられている。焼煉瓦をさまざまな模様の形につみ上げてある珍しい建物であつた。

私達は説明者から暫く離れ、その廻りを歩いたりあらゆる角度から写真をとったりしていた。私達はパタパタと後へつ

いてくる足音にふりかえると、みすばらしいかっこうの子供達が何か小さい物をくれようとしている。煉瓦の破片のようなものだ。手にとってみている人はたちまち四五人の子供達にとりかこまれている。私はくれるのか、何か欲しいのか分らないので知らん顔して景色でも眺めるふりをして遠ざかりつつ、元の門の方へ歩いていった。女の子もいる。その中に何人か長い髪の毛をかく何本にも編み分けている。四五本編むのも随分時間がかかる事だろうに、数の多いのになると十本以上さげている子もいる。顔はとてもかわいい。旅行者にすがりつくようにしているのは主に男の子達。遠くから大人がどなっている。子供達をしかっているようだ。子供達をかわいいと思って相手をしていた人達もペンやバッチやらをひったくるようにとられるのを見て、ふり切るようにバスへかけもどって行く。

ここは見学者が多いというので、その辺の泥造りの家に住む子供達は遺跡の建物の小さい破片をひろって、珍しい旅行者のもっている者と交換することをおぼえてしまったのはなからうか。言葉が通じないので、バカといっているのかケチンポーとさけんでいるのか、私はこういう連中には知らぬ顔をするに限ると、一人でサッサと大またにバスへ戻るのであつた。

三六〇以上の寺院があつたこのブハラはバスの止るところ即ち寺院である。旧市街の中心にカリヤン尖塔がぬっとそびえている。カリヤン寺院とミリ、アラブ回教學院の間にそびえている五十米のこの塔は質量感のある円塔である。

いるいるコウノトリが、その真上に二羽のコウノトリが置物のように止っている。ミナレットと呼ばれる塔に登って回教徒に禱りの時間を知らせたという。砂漠を遙々来る通商隊にとってはブハラ近しと勇気づける道しるべでもあつたろう。主人と私は学堂へ入って行った。手まねでおじぎをしながら入る許可を得た。右側の廊下に一杯はきものがある。お祈りの時間かなと思つていると、ゾロゾロと若い僧侶が出て来た。私達は回廊式になつてゐる建物の真中の庭に出た。二階の回廊より顔を出す僧侶。庭に出てバドミントンをやりはじめめる数人の僧侶。珍らしげに私達を見に出て来た人に会釈をして写真をとらせてほしいと手まねでたのむと、親しげな面もちで一緒に立つてくれた。遺跡となつてガラシとしてゐる寺院の多い中で、ここは宗教的に生きてゐるのだ。勿論タールかモンゴル系か、顔つきは日本人に似てゐる。丸顔で言葉こそ通じないが、目は優しく暖かい表情の学僧達であつた。

この寺院あたりから町並は続いている。バスを降りて歩く

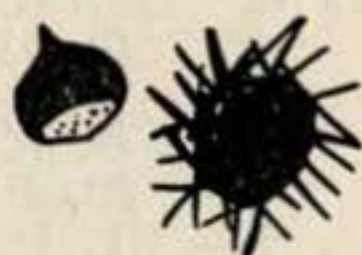
道は泥んこである。前に外国へ行つた時のように着物を着、白足袋をはいていたらどうだったろうか。

足許に気を配りながら屋根のついたほの暗い徑へ行く。その徑の両側に店屋があり、徑は別の方向へ交叉している。店はもう閉ざしてあつたし、ひもで錠をしばり閉めてゐる人もいた。大きなおまんじゅう型の屋根が中心で小さい円屋根が続いて見える。それは今見た別の徑の両側の店々を覆つてゐる円屋根なのだ。ここで砂漠を遙々来た商人達が涼をとり、売買いをする市場なのだ。ブハラには四つもこういうバザールがある。通り抜けたバザールを出ると、又別の寺院があつた。また子供がよつて来た。エリーナさんが何かいってしかつたらしい。走り去る子供達は残つてゐた雪を手早くにぎつて、ポーンと投げつけた。それが若い先生の目鏡のわきに当り、エリーナさんをおこらせた一コマがあつた。この辺の子はすれてゐると、私達は急いでバスに乗りこんだ。

せまい通路をバスは通る。土地の人達は土塀にピタツとはねのあがるのをふせぐように立ちすくむ。又円屋根のバザールを通り、寺院の前を通り、寒くなりはじめた夕暮の町をホテルに戻つた。ウオッカを買いこれおいしいと初めて味う男の人達のにつこりとした顔々。私はまたレモネードと日本茶で砂漠のオアシス・ブハラの夕食についたのである。

## 十二因縁

—その9—



### 顛倒の念(取)

渋谷賢広

(長野県茅野市心光寺住職)

六処に始まる苦惱増長の原理が、触、受、愛と進んで取にまで到りました。この取について、長阿含経、大縁方便經には次の如く四種に分けて説明しておられます。

第一は欲取と申して、六根により認知せられる六境に対し、それに取著することであると申されています。つまり目に色、耳に声、鼻に香、舌に味、身に触覚と言うように、その本体を忘れて色や声や香りにとりつかれてしまうことを欲取と申しておるのでございます。

第二に見取とは、我見、辺見に取著すること、つまり自分を中心にした我欲によってもものを見たり、かたよった考えを

正しいと信じ、この考えこそ全てであるとしてもものを見ていこうとするような辺見に取著することを見取と申しておるのでございます。

第三に戒取と申しまして、仏教の戒、またはそれ以外の戒に取著すること、つまり、戒の意味する本体を忘れて形ばかりにとらわれて、そのとりこになってしまふことを戒取と申しておられるのです。

第四に我取、自分以外の意見をよせつけない、そして、自分を最上として慢心することにと著することであると教えられています。

先にも述べましたように、六処、触、受と進んでまいりました迷界流転の相が、愛をもって本能的に自分を繫縛し、取によってとうとうそのとりこになってしまふ様がまざまざと書き出されているのでございまして、人間が人間であることのせつなさ、みじめさが赤裸々に示されているのでございします。

取と申しますと、何やら自分の中に取り込むもののよう感じますが、実は自分の中に取り込むつもりでいて、そのものとりこになってしまふのでございまして、我見、我執をおし通すと申せば甚だ勇ましく、自立心、主体性が確立しているかのように感ぜられますが、よくそれをつきとめて見る

と、案外迷界にとらわれていて、ほんとうの自立心、主体性から遠いものになってしまっている場合が多いのでございます。近ごろエスカレートと言う言葉がよく使われますが、はじめの出发点より次ぎ次ぎにエスカレートしてまいりますと、ますます我見、辺見に取著して本来の姿より遠のく場合が多いのでございます。取とはそのような姿を申すのでございます。

百喻經に次のような面白いお話がございます。

「昔、夫婦が向い合って座っていました。そしてその間に三つの餅がありました。夫婦は共に分け合って一つずつ食べました。あと残った一つについて二人で約束ごとをしたのです。

『今からものを言ったものの負けにしよう。先にものを言ったら餅は食べられないんだぞ』

『面白いじゃあないか、承知したよ。お前さんなんかに負けやしないんだから』

そこで無言の行が始ったのです。二人は何をしても決して口を開きませんでした。

しばらくしてこの家に盗人が入って来ました。盗人はおそるおそる家財を盗み出しましたが、盗んでも盗んでもこの奇妙な夫婦はにらみ合っているだけで何も言いません。目ぼし

いものをみな手中に入れましたがどういうものかまだ二人は何も言いません。ついに盗人も大胆になりました。そしてこともあろうに夫の前で妻を侵しにかかったのです。さすが意地を張り通していた妻も我慢ができなくなって叫びました。

『お前さんて何ていう馬鹿者なんだえ。私がこんなにされていても何も言わないのかえ』

その夫はそれを聞いて手を打って笑って言いました。

『どうだ、俺の勝ちだぞ、この餅は俺のものだ、お前なんかにやってたまるか』と」

そして経は次のようにさとされています。

「凡夫の人もまたかくの如し。小名利の為の故に其の善法をうしなひて三塗に落つ。まさに五欲において耽著し、大苦にあうといえども以てわずらいとなさず。彼の愚人の如く等しく異りあることなし」

ことの発端は瑣細なことであっても、そのことに取著して大本を忘れ、小名利の為にかえって大義を捨てざるを得ないような羽目に落ち込む姿が如実に示されています。

一つの餅のために、まさかそんなばかかしいことがと思われるのですが、さて目を上げてこの世の中を見廻しますと、大学に於て、国会に於て、この夫婦と等しく、異りあることなしと思われるような様相が、随所に見られるのは一体

どういうことなのでしょう。

取とはこのようなことを言うものであり、外界の一現象のためにかえって本来の姿を忘却して末節に憂き身をやつすことと申せましょう。

法然上人が専修念仏をおとなえになって立教開宗をせられた後に於ても、この念仏とはいかなるものかと言うような論義が各方面からなされ、それが必ずしも法然上人の意にかなうものばかりではなかったようでございます。甚だしいものになりますと上人の御法語を逆手にとって、次のような説をなすものさえ現れました。

「今ごろの念仏者、私の義をたてて、悪業をおそるるは弥陀の本願を信ぜざるなり。数遍をかさぬるは一念の往生をうたがふなり、行業をいへば一念十念にたりぬべし。かるがゆへに数遍をつむべからず。悪業をいへば四重五逆なをむまる。ゆへに諸悪をはばかるべからず」

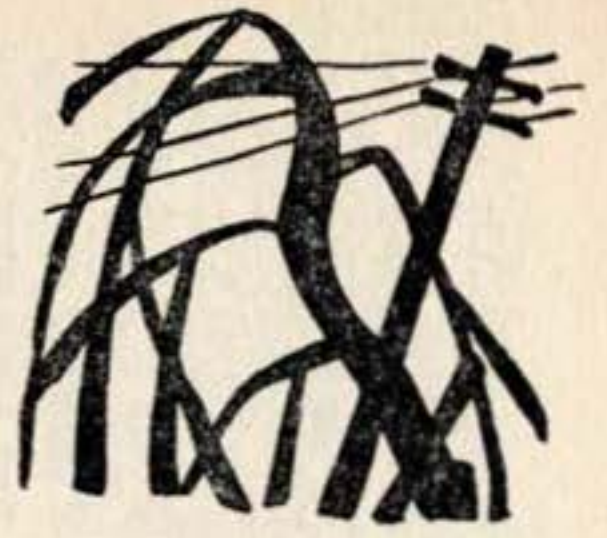
阿弥陀仏はいかなる悪人も救いとらせると申されておるのだから悪いことはいくら重ねてもいいのだ。悪行をおそれると言うことは阿弥陀仏の本願を信じていない証拠である。念仏は一遍申せば救いとらせると言っておられるのだから、何も数多く申す必要はない。悪行は親を殺すという罪までも救

われると申しておられるのだ、まして少々の悪事など問題ではないではないか、という論法です。

法然上人が罪深き我よとお歎きになったそのことは、そもそも、宗教的に我が身を省みた、内省の上の仏に対する罪深さであつたはずです。その内省が深ければ深いほど、わが身がみ仏のお慈悲にあずかることのかたじけなさを身にしみて味うことができるのです。それを罪深いものこそ弥陀の本願にかなうとすれば、罪を犯すことこそ弥陀のお慈悲を受けることができるかと勘違いして、罪の意識をもつことさえ弥陀の本願を信じないが故にそう思うのだと言うように、我執偏見するものさえ現れて来たのでした。

まことに不遜な、おそれたこの考え方が実は今に至るまで絶滅しているとは申されません。どんなに罪深くとも阿弥陀仏のお慈悲の中に救われてゆくのだという安易な前提が、私どもの心の底に断じてないとは言いきれないのです。先程の夫婦が、餅と盗人とを顛倒したようなことが罪と本願の場でなされているのです。

一方では罪の意識も信じない。また他方では弥陀の本願も信じ難い、そう言う者の申す念仏は、顛倒念仏というより言いようのない念仏と申さなければならぬのです。



## この頃思うこと

— 海外旅行・食卓作法・葬式 —

石井真峯

(静岡県富士宮市在住)

### 一、海外旅行とエティケット

航空機の発達と、生活が苦しいといいながらもふところ具合がよくなったためか、昨今の海外旅行者の数は大変な増加をしているようである。広く世界を見て来ることは結構であるが、若い者の中には無茶なのがいて、旅費の不足や、国際的、社会的、道徳的な問題まで引き起し、在外公館に迷惑をかけるので困っているというのを、先頃新聞で読んだが、そうなるとう海外旅行も考えものである。

海外旅行はひとり一般の人だけでなく、インド仏蹟参拝を目的として、寺院や檀信徒へ

の呼びかけも多くなってきた。飛行機の発達しない十数年前までは、インドの仏蹟参拝など、一部の学者を除いては一般の人には想像もできなかったことだ。

この頃では仏教系の新聞雑誌にもしばしば広告が掲載され、数十万円を投ずれば自由に行けることになったのは結構である。しかしヨーロッパやアメリカ行となると習慣のちがいなどから、日本旅行者が思わぬ不評を買うことがしばしばあるようだ。この点東南アジアの旅行は気が楽だ。外国の習慣などに従わなくて、日本の習慣でやればいいではないかという意見もあるかも知れないが、日本の習慣が国際的見地から甚だ具合の悪いことがある。

私は昭和二十九年冬、ビルマの首都ラングーンで開かれた第三回世界仏教徒会議に出席し、会議終了後、インド仏蹟に参拝し、三十一年冬、ネパールの首都カトマンズで開かれた第四回世界仏教徒会議、三十七年秋、アメリカ各地で開催された仏教東漸七十年記念日米仏教文化会議の折に、各宗の高僧がたや在家の人たちの団体の一人として参加し、多くの友を得て有難く思っているが、そういう機会に感じたことを二三書いて参考にしたいと思う。このようなことはわかりきったことで、実にばかばかしく考えられ、書くのも気のりがしないのだが、今日でも僧俗いろいろな会合に出てみて、同じ感を抱かせられるのであえて筆をとった。

## 二、食卓作法

一番目立つのは洋式の食卓作法（テーブルマナーズ）である。細かいことは紙数の制限で書けないから二、三大切なことに触れ、あとは最後に書いてある参考書を読んで頂くことにする。まず椅子の掛け方であるが、日本人の掛け方は概して浅すぎる。テーブルと体の間が拳一つ入る程度まで深く腰掛けないと、及び腰になって甚だ不体裁になる。

食事をするには、いっさい音を立てないよう注意すべきである。スープが出ると、あちこちでチューチューすごい音が出るが、これはおかしい。食物を口に入れてクチャクチャ音を立てるのも禁物である。口をむすんで食べれば音は出ないのだが、子供の時から習慣づけないと、大人になっても改まらない。

日本食の場合も同様であるが、困ったことに茶の湯では一服頂戴する時、最後は音を立てるものらしいのと、そば・うどんの場合ツルツル音を立てるのが当り前になっているこ

とである。食事中、及び食後ゲップをする人があるが、放屁と同様に考えられるから慎しむべきである。

食事の終りのコーヒーももちろん音を立てて飲むではいけないし、スプーンですくったリ、スプーンをコップの中へ入れて飲むべきではない。和食の場合、お茶でグブグブをしてから飲む人があるが、見苦しく絶対にやっ

てはいけない。  
ナブキン・ナイフ・フォーク・スプーンの使い方も一応きまっているから、それに従うのが望ましい。食堂へは洋服ならネクタイをかけ、上衣を着用するのが礼儀であるが、この頃はアメリカなど、特に簡略になり、略装も見かける。但し寺院関係者が改良服も袴も着用せず、白衣の着ながしで食堂、廊下へ出ることは禁物である。ホテルでは自室以外スリッパの使用は禁止されている（日本のホテルのようにスリッパは部屋に置いてない）。ホテルで自室のドアの開け立てに音をたてないよう注意したい。廊下の大声も他人の迷惑である。バス・タブの中はすべるからゴムの敷物があつたら、これをバス・タブの底へ敷

いておけばすべりどめになる。ある人がホテルのホテルのバスですべって、ひどい失敗をした例を私は知っている。

エチケットについてはこのくらいにする。次の参考書をお読みになれば得るところがあると思う。

日高孝治

共著

エチケット

三三〇円

日高艶子

共著

淑女の資格・紳士の条件

光文社

与謝野 秀

共著

エチケット小事典三三〇円

与謝野道子

共著

いつでもどこでも役立つ

マナー

光文社

石倉豊著

テーブル・マナー二五〇円保育社

## 三、葬儀の祭壇と仏像

先頃「葬式無用論」という本が出版され、仏教系の新聞・雑誌にいろいろな人の反論が出て、一時賑やかだった。私も一本買って読もうと思ったが、内容は大体想像出来るし、田舎の本屋では売っていないだろうと思い、やめにした。「無用論」といっても改革論の

意味もだいぶあるのではないかと思った。それなら私も賛成である。

東京のお通夜では酒類もご馳走もたくさん出て、なかなか賑やかであるというが、私の住む地方小都市ではその点では別段問題はない。東京その他の大都市のことはわからないが、儀式と祭壇については改める点があると思う。儀式は今もって聞いただけでは全く意味のわからない棒読みのお経が用いられているだろうが、これを一時間も一時間半も続けられたら、それに対する批判が出るのは当然である。なるほど昔からの棒読みもいいところがあるし、また和文の経典で本当にいいものが出ていないことも事実であるが、すでに改めるべき時は来ていると考えて間ちがいない。

次に葬式の折の自宅及び菩提寺の式場における祭壇が、日に日に華美になっていく「もちろん葬儀社の担当である」。華美というより、むしろ無用、醜悪な装飾を所せましとむやみやたらに並べすぎて、美しいなどとはとても言えない。赤・青の色電球やネオンまで使った電燈を三十も四十も点燈する。しかも

甚だお粗末な竜の彫刻をほどこした燈籠つりがつり下げてあるなどは私の一番嫌いなものである。パチンコ屋の開店祝いを思わせるような花環も困った流行だと思うが、寺院方のご意見はどうなんだろう。こういう花環も昨今こちらではその時だけの借物が多く、寺にあげていくのは少なくなった。寺に残していくのがあると、私はなるべく早く人目にふれない廊下へかたづけてしまおう。

更に困ったことはこの二、三年前から祭壇に仏像（観音菩薩らしい）を安置し、左手を差しのべて故人の位牌を持たせるようになっていたものもある。私は本堂ではこれはお断りすることにしている。観音菩薩を冒瀆するようには思えるからである。しかしこういうことをいうと葬儀社の営業妨害になるように思えるので、少し遠慮をしていわなくてはならない。

地方小都市でも本堂用の立派な祭壇になると十数万かかるらしい。そこで欲張るわけではないが、菩提寺へのお礼は極めて小額になる。もっとも大都市では寺院からお布施の請求書を出すところもあると聞いているが、真

偽のほどはわからない。テレビで見た「きんらん和尚」の中ではお布施問題は葬儀社が全部担当しているようだったが、そうなのだろうか。

それからもう一つ思い出したことは、本堂での葬儀の折、遺族・親族等のほか数十人の会葬者を霊前焼香に呼び出すので、時間が非常に長くなり、従って霊前焼香の意義も軽いものになり勝ちで、式がだらけることになるが、他の地方の実情はどうだろうか。

葬式無用論が出て、恐らく葬儀はなくならないだろう。子供が生れれば誕生の祝いをし、七五三の祝いもすたれそうもないし、学校には卒業式があり、成人式・結婚式もある。寿命がなくなつて死ねば、一応葬儀を営むことは当たり前であると思うが、そのやり方には考えるべき点がある。あくまでも簡素に厳肅に行われるべきものである。そして前述のように、聞いてある程度わかるお経を読むべきであると考え。それに加えて導師は最後に短かい、要領を得た法話をすべきであるまいか。そうすれば葬式無用論も出ないであらう。

# お仏壇について



福西賢兆

(大正大学実践仏教講師)

お念仏を称える生活こそ真の浄土宗徒として相応しいことは申す迄ありません。法然上人が浄土開宗の基とされた観経疏には、

一心に専ら弥陀の名号を称え、行往坐臥に時節の久近を問わず云々とあります。

このおさとしは、仏に帰依して毎日を明るく目覚めさせて頂き、法に帰依して生きる喜びを受取り、僧に帰依しては、その集いの力を和やかに広めてゆく時、真に仏恩を喜び、念仏を心から称えさせて頂くことが出来ます。それは何時、何処、どんな場合に、だれでもが合掌し礼拝できる状態をおさとし下さっておりますが、形に恭敬を表す威儀を伴

う時には、その対象となるお仏像、お名号、お位牌等を安置して礼拝することが極く自然であり、精神の拠り所としてお仏壇をおまいりするのであります。

宗門の各家庭には、必ずお仏壇を安置して朝夕の勤行をかかさないうにしたいものです。静かに仏前に端座すると、子供の頃に聞きなれた祖父母や父母が唱える読経の声、お念仏の調子、盤の音が耳の底にまざまざと聞えるような気がします。経済的利害ばかりを第一に追求している現在こそ、まことに心の潤いを求めねばならぬ時であり、外国から、エコノミックアニマルなどとさげすまれない

ためにも、あなたが今お念仏を真剣に称える時であります。

仏壇の形式を考えますと、日本座敷の床の間は、往昔には掛軸にご尊像やお名号を用い、その前に灯燭を向って右、中央に香炉、左側に華瓶を置いて(これを三具足といいます)日夕礼拝を行っておりました。

戦国の世の武将は、戦場にも持仏の供奉僧をつれて出陣したことが明らかで、徳川家康と親智国師とその弟子廓山、了的の関係など人口に膾炙する所で、移動式仏壇とも申せましょう。

三河尾張、北陸地方で真宗の盛んな地方は

立派な仏壇を各家庭が備えており、須弥壇、  
宮殿、上卓、前卓、金障子の構造をもつ、巨  
大なもので、その家の財産の多寡を示してい  
る程であります。信仰の強さ深さも又表わ  
しているといえます。

近時、若い家族の団地住いが多く、仏壇を  
安置する場所がなくなってきましたが、たと  
え簞笥や本箱の上であっても結構ですし、仏  
壇の形式をとらなくても、お仏像に灯明、香  
炉、花瓶の三具足を飾れば充分であります。

東京教区教務所は、最近扉付のご本尊を作  
り各寺信徒にお頒ちしています。これなどは  
団地向ご本尊と申せましょう。

お仏壇の種類規模は色々ありますが、大別  
して漆塗のものと唐木のものであります。  
宗門では、どちらを用いても良いので購入の  
際は、家族で相談して、どの部屋のどこに安  
置するかをきめておくことが大切です。

次に人によっては、仏壇の向きを云云する  
傾向がありますが、仏壇を安置し、ご本尊を  
拝む方向は、常に西方と思って礼拝する訳で  
すから、方角のことは気にしないことであり  
ます。又、お仏壇や仏具等を購入する時期

は、年回の時、お盆、お彼岸等がよいなどと  
いつて時期を考える人がおりますが、これも  
大変な考え違いでありまして、まったくの迷  
信であります。浄土教では、今、今のいのち  
を尊く頂くことでありますから、思い立った  
が吉日であり、普段健康である時こそ、順縁  
に感謝する気持で購入すべきであります。そ  
して毎日お詣りしてこそ、その意義があると  
いえます。

お仏壇を購入したならば、直ちに菩提寺に連  
絡して、方丈さんに開眼の式を執り行って頂  
きます。元祖法然上人は東大寺の大仏開眼式  
にお念仏を以て行われたと伝えられておりま  
す。お作法に基づいた開眼法をして頂かなけ  
れば、仏作って魂入れずということになるの  
であります。

お仏壇の中央を須弥壇といい、ヒマラヤ山  
を形どり、ご本尊を安置申し上げ、その両脇  
には、高祖善導大師を向って右側に、元祖和  
順大師法然上人を左側に、木像、絵像を問わ  
ず安置申し上げます。

ご本尊は立像舟形光背が本来であります  
が、お坐像でも結構であります。

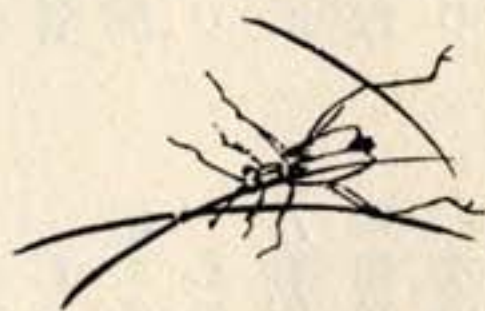
お位牌は先祖の法名を書き、数の多い時は  
過去帳にくわしく書いておきます。過去帳は  
その家の記録でありますから、なるべく続柄  
年令歿時等を明細にし、菩提寺で書いてもら  
います。お位牌だけでご本尊のない仏壇を見  
かけますが、これでは仏壇とは申せません。  
ご本尊如来様の大悲光を受取れないためであ  
ります。

お給仕の実際は、どんなものでも他所から  
頂いたものは、必ず一度はお供えしてからお  
下げすることです。お水、お香、お灯明は毎  
日ですが、お花はなるべく新鮮なものをお供  
え下さい。お仏飯は、朝お上げしたならば、昼  
迄にお下げするのが本来です。お命日には、  
お膳の精進供をいたします。配置は間違いや  
すいので、ご飯の前がおつば、お汁の前がお  
ひら、中央が高杯とおぼえて下さい。

お給仕役は、なるべく子供さんがよく、汚  
れない心にみ仏の尊い種を植えつけること  
が、成人して、立派な人格を完成する結果と  
なり、ひいては平和な国造りに結びつくもの  
と考えます。

ハガキでひとこと

彼岸に思う



山本 空外

(広島市庚午北在住)  
(広島大学名誉教授)

彼岸はもと梵語「パーラ」の漢語で、詳しくは「彼岸に到った状態」(パーラミター) (波羅蜜多) を簡言しているわけなのに、そのもとの印度、またはそれを伝えた中国、いずれもこの仏教から離れたのに反して、ひとりわがくのみは、仏教の根本なるお彼岸を、行事としてもすでに一千年以上続け来り、況んやその行的実践にいたっては全く懸命に邁進して生涯をつくす人々が今なお跡を絶たず、禪者も念仏者もみなその一人にはかならない。またこの列に直系せず、はたして人間としての

生き甲斐に徹しうるであろうか。わたくし自身五十年来一筋に法然上人の御跡をしたい、念仏一行の生活のなかにお彼岸の有難さを味わい楽しみ、もって心身の清められる幸せは、またおのずと周囲の人々にもつながり、ともどもにそうした彼岸すなわち浄土に生きられる仏縁の現実こそ、人類永遠の独尊の生活価値にはかならぬと確信する。

藤井 実 応

(愛知県小坂井在住)

幼少の頃、お彼岸となると、父や母に伴われて、必ず寺の傍にある祖先のお墓にお参りする。お寺には地獄の絵がかかげられて恐ろ

しい思いをしたことも覚えている。お説教があるので分らぬながら聞いていたが、今もその時のお話しを覚えていいることもある。

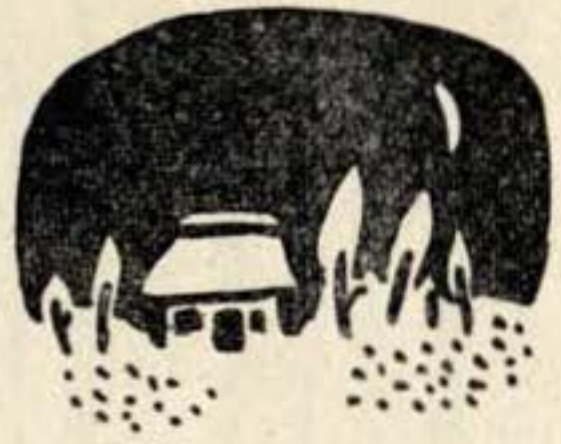
このような行事の中に、おのずから祖先の恩が偲ばれ、宗教情操も養われゆくのであるうか。そのようなことも一つの種子<sup>たね</sup>となつて私は僧籍に入ることとなった。

最近はお彼岸中は殆どどこかのお寺へお説教に出かけている。お中日には、ここ十数年間毎春秋、桑名光徳寺へ参っている。同寺中心の念仏者たちに会うことが一つの楽しみにもなっている。

彼岸にちなんで彼岸を偲び、念仏を励みあうことは、この上ないよろこびである。

彼岸とは極楽浄土のこと、アミダ仏の存す世界、この世を超えた涅槃<sup>おさとり</sup>の世界、父や母、祖先も在すなつかしき世界である。その浄土は私共の真に安らぎうる処であるが、同時に生きて働き出る依り処でもある。即ち念仏者の生活活動の基盤である。

お彼岸にあたり、彼岸を偲び、南無阿弥陀仏申して、彼岸の光をうけて、安らかに力強く生ゆきたいと願うのである。



ひとくち伝記(九)

開教に生命をかけた人

— 松尾諦道師 —

高橋良和

大平洋上の夢の島ハワイル、はじめて浄土宗が開教してから今年で七十五年になる。

今から五年前の七十年の記念法要のときは、ホノルルの別院はじめ各島の寺院で盛大な記念行事が営まれたものである。

一八九四年に、はじめてこの地に白石堯海という愛宗の青年僧が、ハワイ宣教会といったものをつくって、この地の開教を思い立ったのである。他宗の開教、特に西本願寺のハワイ開教よりは少なくとも二年早いのである。

当時のハワイの各島に渡るのには、船しかないのです、今なら東京国際空港かな六時間半の距離であり、青森、上野間の

特急より早くハワイにつくことが出来るのである。

船で行くと一週間ぐらいかかるが、この当時はまず一カ月はかかっただろうし、その船も、おそらく丸木船にも似た、まことにお粗末なもので、生命をかけてのハワイ開教といわなければならぬ。

このときに、ハワイ開教に旅立つのが、松尾諦道という僧侶であった。

この人は、長野県飯田市の柏心寺の弟子であって、もちろん青年僧であった。長野の山奥の寺の弟子がどうしてハワイの島にわたったのか、その志がどうして起きたのかは知る由もないが、少なくとも、海外雄飛の青年として、やむにやま

れぬ心からであつただろうと思われる。

当時のハワイは、日本からの移民を待ちこがれていたもので、その移民を得て原野の開拓に力を入れようという時代である。

火山の島のハワイの各島は、それこそ西域の地を思わすような広野であり、黄塵万丈の砂漠である。今でこそ各島間は、ジェット機で二三十分間の距離であるが、その頃の交通は、船だけで、しかも、港も開かれていないというから、ハワイ島のラッパホエホエなどという珍しい地名のところ、開教監督所がつくられるのであるが、そのときには、岩壁に船をつけて、ロープを吊し、それに籠をぶらさげて、そのなかに乗って、上陸したとさえいわれるのであるから、ハワイ開教などは、生命がいくらあっても足りないほどである。

そして、島の交通機関は、馬であるというのだから、松尾諦道師の苦勞たるや筆絶につきるといえる。

松尾師のハワイ行きは、開教ということもあつたが、開教以前のハワイ事情調査という意味もあつた。

然し残念なことに、松尾師は長野県の人であるから、ハワイの移民は、山口、広島、熊本、福岡などが非常に多いのである。

松尾師は島をまわりながら考えた。

これはどうしても、こうした移民と、早く結びつくためには、その移民の出生地の僧侶を招かなければならない。そう思うと、すぐさま、宗務に、その由を報告したのである。

どうか、早く移民と関係ある地域の僧侶を送ってもらいたい。

このねがいを通じて登場してくるのが、山口の岡部学応師なのであるが、この岡部師が背負ってきた御本尊は、今もハワイ島ハマククの地にある。仏教会堂、当時は各宗ただ一つの寺院があるから、このように名乗っているが、そこに安置されている。

かくして開教第一歩は、これで一応かたちづくられたが、当の松尾師は連日の布教と、島から島への調査と視察のために、ついに過勞となり、雄図むなしく、ハワイの地において発病してしまった。

先生、この身体で、この暑いハワイにおられるのは無理でございます

そうか、でもハワイの島に生命をかけた自分にとって、どうしてもこの島で死にたい。でも一度東京で養生されても、全快の上でもう一度、この地にこられることも。

松尾師の教化をうけたこの島の檀信徒は、師に帰国をすすめたのであった。

師の病気はかなり重体であつたらしい。

そこで、やむなく心をハワイの島に残して、松尾師はひとまず、帰国することになるが、もう一人歩きはとうてい出来ず、船に乗るときも担架によつてかつがれて上船し、船中全くの一人、その淋しい心を、誰のなぐさめをうけることもなく、横浜港に上陸したのは、日本の夏の頃であつた。

宗務や、知人の出迎えをうけたが、松尾師の病気はかなり危険である。

すぐさま東京大学の付属病院に入院して、療養につとめたのであるが、長い間異国で重ねた心労は、遂にこの人を再びもとの身体にしなかつたので、明治三十一年九月十三日に、この青年僧はこの世を去つたのである。

これこそ、ハワイ開教最初の犠牲者であり、身をもって布教にあたつた、全く殉教の人であつた。

松尾師の法名は、恒蓮社聞誉上人法阿専念諦道和尚ということ、今もなお、東京芝清光寺の墓地にその墓碑があるといわれる。布教に挺身した一青年僧が逝つて七十年になる。ハワイの各島に、このような殉教の人々が幾人もいることを忘れてはならない。

〳〵御年始のご挨拶がわりに御用を、

## 《 予 約 受 付 中 》

『浄土宝暦』 価30円・送料25円 40ページ

50部以上より割引 送料実費

例年通り発行いたしますのでお早目にお申込み下さい

---

東京都千代田区飯田橋1—11—6

発行所 法 然 上 人 鑽 仰 会

電話 (03) 262—5944 番

# ◇ 浄土トラクト ◇

|            |      |       |           |
|------------|------|-------|-----------|
| 四季の寺まいり    | (再版) | 安居香山著 | 価30. 円15  |
| 浄土宗のおしえ    | (五版) | 宮林昭彦著 | 価30. 円15  |
| 一枚起請文をめくって |      | 村瀬秀雄著 | 価120. 円35 |
| 選択集私解      |      | 竹中信常著 | 価120. 円35 |
| ものいう石      |      | 竹中信常著 | 価150. 円45 |

多数お申込みには割引いたします。施本にご利用下さい。

発行所 法然上人鑽仰会 TEL (262) 5944  
振替 東京 82187

村瀬秀雄 訳

## 和文浄土三部経

新新版  
204頁

附・法然上人撰「三部経釈、抄述

念仏信仰の聖典三部経の全訳

定価200円 送料55円

発行所 法然上人鑽仰会

TEL (262) 5944  
振替 東京 82187

「浄土」講読規定

一部 定価 六十円

会費一カ年 金七二〇円

(送料不要)

浄土 九月号

昭和十年五月二日  
第三種郵便物認可

昭和四十四年八月二十五日 印刷  
昭和四十四年九月一日 発行

定価 六十円

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

振替東京八二一八七番

東京都港区芝公園十九号地の一

浄土宗務支所内

編集室 法然上人鑽仰会

昭和十年五月八日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)  
昭和四十四年八月二十五日印刷 昭和四十四年九月一日発行

浄土

第三十五卷

第九号

定価金六十円 (送料六円)